

酒井仁

表紙 / 高浜太郎

精霊騎士

アクエアル

外伝

裏切りの騎士

二次元ぷち文庫

2D PETIT POCKET NOVELS

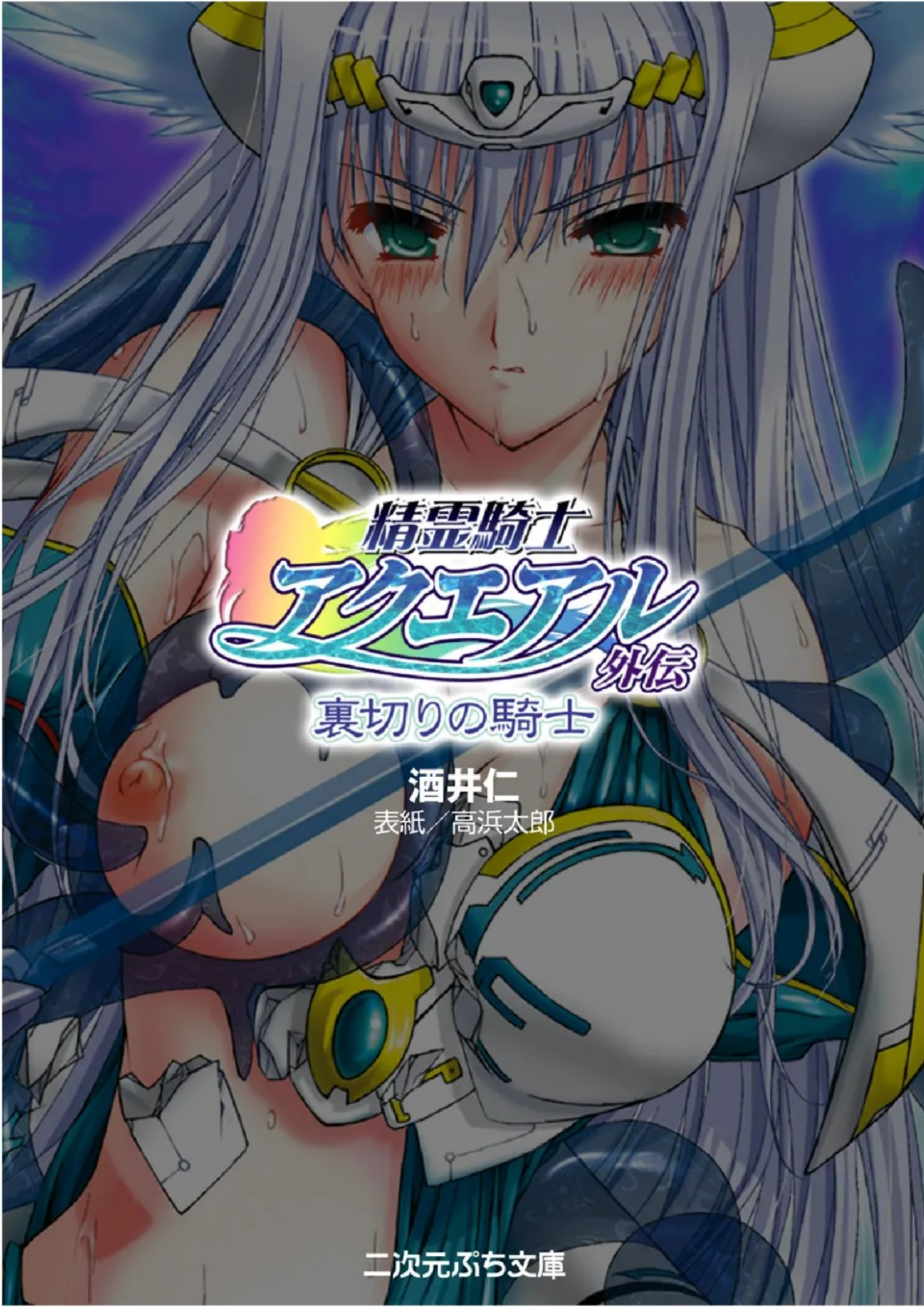
酒井仁

表紙 / 高浜太郎



二次元パチ文庫

2D PETIT POCKET NOVELS



精霊騎士
アクエアル
外伝

裏切りの騎士

酒井仁
表紙 / 高浜太郎

二次元ぷち文庫

当ファイルは、モバイル二次元ドリーム『精霊騎士アクエアル外伝 裏切りの騎士』に基づいて作成しております。

※本作は二次元ドリームノベルズ『精霊騎士アクエアル 隷属の花嫁』『精霊騎士アクエアルII 穢されし聖涙』（キルタイムコミュニケーション刊）とともにお読みいただきますと、よりお楽しみいただけます。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

※本作品は電子書籍配信用に再編集しております。

登場人物紹介

アクエアル

王国の危機に際し、聖なる泉より召喚された水の精霊騎士。人々に混乱をもたらす火の精霊ヴァハに戦いを挑むが、姦計によって快樂に堕ちてしまう。

マリオン

王国の騎士の称号を得た青年。騎士の誇りと正義感を抱いている。

ヴァハ

国王エイヴァゼインの身体を借りて現世へ召喚された火の精霊。

「王国」に火の禍あり。乙女の祈りもて召喚されしは美貌の水霊騎士。災厄の根源を断たんと聖なる剣を振るうも、悪逆の根は深く、禍なる火の王の前に正義はついに挫かれる。かくて「王国」は闇の帳に閉ざされ、民は苦難と絶望の淵でただ嘆くのみであった……。

二年の見習い期間を終え、国王エイヴァゼインより騎士の称号を賜った青年騎士、マリオン・ブリューゲルは、騎士団員のみが出席を許される宴に初めて参加していた。

王国全土より集められた豊富な食材を用いた料理はまさに絢爛豪華、騎士一人ひとりに美しい侍女が寄り添い、薄絹しかまとわず、手ずから料理を食べさせ甘えているその様は、侍女というより娼婦のようでさえある。

(度重なる戦乱と干ばつで、各地方ともに農作物は不作と聞いている。辺境では村ごと餓死に追い込まれたという噂さえあるのに……このような馬鹿げた贅沢が許されていていいのだろうか?)

見習い時代、先輩騎士に付き従って戦場を何度も駆けてきたマリオンの目に、王国は荒廃の一途をたどっているとしか思えない。にもかかわらず、王エイヴァゼインは反乱分子の平定と称しては徒に戦火を広げ、戦いに酔いしれている。

「どうしたマリオン。その女では不満か？」

先輩騎士は早くも葡萄酒に酔って赤ら顔をしている。侍女の肩に回した手を衣服の内側に突っ込んで乳房を揉むと、女は身をくねらせて嬌声を上げる。

マリオンの給仕をしている侍女も、鼻にかかった声を漏らしてもたれかかってくる。威厳あるべき王城の広間とも思えぬ光景に鼻白む思いだが、玉座の王が実に満足げにしているので、なにも言えない。

巨大な体躯と髭の王の傍らには、侍女は付いていない。宴に酔いしれる騎士たちを眺めている背中からは威圧的なオーラが立ち上り、マリオンは無形の緊張を強いられる。王には魔界に通じた特別な力があるという話も、あながち嘘ではないのかも知れない。

そしてまさしく「魔王」にふさわしいエイヴァゼインには、彼だけの特別な付き添いがいるということ、その場の誰もが知っている。

「おう、そろそろ始まるようだぞ、マリオン。お前もあれを見ればそんな仏頂面じゃいられなくなるぞ」

「は、なにか特別な出しものでも……」

悩ましい香料が青年騎士の鼻腔をくすぐる。異国の妙なる調べと共に現れた銀髪の美女の姿に、マリオンの息が止まる。騎士たちの間からも、押し寄せる波濤のようなどよめきが上がる。

「ア、アクエアル……王妃、様……………」

しゃらりと音を奏でそうな銀の長髪。両の瞳は碧のクリスタルもかくやと思わせる深い輝きを放ち、通った鼻梁に蕾の唇、顔の造作は恐ろしいまでに整っている。

そしてなにより目を引くのは、完璧なるプロポーションを惜しげもなくさらけ出すその衣装。侍女たちのものよりさらに際どく、乳

房の丸みや腰のくびれがくっきりわかり、素肌が覗く箇所も少なくない。

下手な裸身よりも扇情的で、申し訳程度に隠された乳首など、しこり具合まで確認できるいやらしさだ。本人もそのことを自覚しているのか、染み一つない素肌が羞恥にうっすら火照っているのが、なおエロスを倍増させている。

エイヴァゼイン王の妃にして謀反人、反乱軍のリーダーとして虜囚の目にあい、王の慰み者となっている水の精霊騎士——アクエアルである。

（私は遠くからしか見たことがなかったが、噂にたがわぬ美しさだ。水の精霊というのも、本当のことやも知れぬ）

「我が妃、アクエアルよ。今宵の宴には初参加の騎士もいる。存分に新参の目を愉しませてやるがよい」

「……………はい、わ、我が君。では舞でも一手」

王と目を合わせぬように顔を背けつつ、精霊はその命に従うしかない。そのことを熟知している王は唇を歪め、指をぱちりと鳴らす。轟ッ、と巨大な炎が立ち上り、そこから見るもおぞましい怪物が出現する。

「な、なんと醜い……ッ。あれは本当に生き物なのか!？」

豪胆をもって鳴る騎士団員たちですら怖気を震う巨大な肉塊は、全身から無数の突起を生やし、どこが頭やら尻やら皆目わからない。何十本、何百本と生えたそれがまさしく男根であることに気付き、侍女たちが恐怖のあまり失神する。

「どうだ、我が妃。お前の大好物を全身から生やした、特製のキメラだ。遠慮せず、存分に味わうがいい」

それが忠誠を誓った王の言葉でなければ、マリオンは即座に怪物と精霊の間に割って入っただろう。だが、君主より賜りし騎士の資格は、青年にはまだ重すぎる。面白がって囂し立てる他の騎士たちの中で、マリオンは美しい精霊が怪物に辱められるのを見守ることしかできない。

「では……あの魔物の……あれをすべて満足させられればよいのですね。わ……わかりました、我が君」

衣擦れの音を立てて、化け物に近づく精霊。たおやかな手を伸ばし、無数に突き出た陰茎に指を絡めると、怪物は不気味な声を上げてのたうつ。

「こ、こらっ、おとなしくしないか……うう、臭……ッ」

両手に握った陰茎を上下にしごく。悪夢のような光景に騎士たちの興奮はいや増すばかり。血走った男たちの視線を浴びて、精霊の目元が赤く染まる。

なまじ怪物に犯されるよりも、自分から怪物の陰茎を手にして淫らな奉仕をさせられるという行為の方が恥ずかしいのだろう。早く射精に導こうと手首のスナップを利かせ、きゅっきゅとしごき立てていると、先端からぬらぬらした透明な液体が滲んでアクエアルの指を汚す。

「くっ、早く出さないか……あっ、ひゃううっ？」

びゅるっ びゅるびゅるッッ！ なんの前触れもなく、白い樹液が宙を舞う。それはべっとりと精霊の肩や頬にまで飛んでへばりつ

く。精液特有の生臭い臭気がぷうんと立ち上って美貌の精霊を包み込む。

「どうした、まだたった二本だけ？ そいつのちんぽ何本あると思ってんだ」

顔を歪める美女に野次が浴びせられ、下品な笑いがマリオンを不快にさせる。

仮にも妃に対する言葉遣いとは思えないが、騎士たちがアクエアルを見下しているのはよく理解できる。妃とは名ばかりでアクエアルは敗残の将、エイヴァゼインの性奴隷にも等しい存在なのだ。

(くっ、騎士道とはなんなのだ！ 女性を辱め、貶める騎士道など……ツツ)

そう思いつつ、魔物の精液を浴びた銀髪の美女を見るだけで、股間が反応するのは抑えられない。アクエアルは果敢にも新たな陰茎を手し、額にうっすら汗をかきながら不気味な奉仕を続ける。眉をひそめ、いつしか口は半開きになり、荒い息遣いはまるで悶えているかのようだ。

いや、そのころにはマリオンも他の騎士たちも気付いていた。最初の精液を浴びてから、明らかに精霊の顔は上気し、興奮の兆候を見せている。

「はぁッ、は、あふう……ンンツツ！ あふう、むちゅっ……れる、ちゅば……」

肉塊から生えている陰茎はまさに無数、両手に握っていても目の前にも乳房の前にも勃起した男根がそそり立っている。アクエアルは愛らしい唇を開けると、目の前の肉茎にしゃぶりついていた。

その下方から生えている竿に乳房を押しつけてゆすると、頼りない薄絹はずれて、生乳の間に魔茎が挟まれる。乳房だけではない、平らな腹部も肘もすべて怪物に押し当てるようにして、まさに全身を用いて魔陰茎に奉仕しているのだ。その顔からは羞恥が消え、むしろ被虐の快感にあふれている。

ぶびゅっ、どびゅどびゅっ！ うおおおおおんっっ。

両手に握った茎から再び大量の射精、乳房の間にも白濁を迸らせ、肉塊が快美の咆哮を上げる。魔物のザーメンを全身に浴びて、水の精霊も悦びに全身を打ち震わせ、ついに卑猥語がその唇から発せられる。

「あぁッ、ちんぼ汁がいっぱいッ……！ おっぱいにもッ、お口にも飲ませてッ、魔物ちんぼの汁飲ませてェエッ！」

半開きの唇にびゆるびゆると臭い牡汁が注ぎ込まれる。アクエアルはそれを舌にねっちょりと絡めて味わってから飲み下す。どんな娼婦でもできないようなおぞましい行為に悶えよがる水の精霊は、それでも美しくマリオンの目に映っている。

ほとんど全身で魔物に抱きつくような格好で、銀髪の子霊は素足の指にまで魔物茎を挟んでしごき立てる。精液と先走りの汁が入り混じった凄まじい臭気を胸いっぱい吸い込んで、アクエアルはついに股を大きく広げ、ひときわ巨大にそそり立った肉柱の上に腰を落としていく。

「あぁあッ、入ってくるぅ、魔物のちんぼがおま○この奥まで……ッ。こんなッ、大勢に見られながら、魔物ちんぼハメちゃうぅ……」

精霊の蜜壺はよほど心地よかったのか、挿入と同時に怪物は白い液を噴出し始める。肉の合わせ目から「びゅっ、びゅるっ」と毒液が噴きこぼれ、乙女の太ももを幾筋も伝い落ちていく。

後でどれだけ後悔するかわかっていても、もはや美しき精霊の肉体は忘れようもない快樂を刻みつけられ、支配されているのだ……青年騎士マリオンは、目の前の残酷な現実には呆然としつつも、股間のものは衣服を突き破らんばかりに勃起していたのだった。

夜の王城は、沈黙のうちにあった。王妃にして虜囚でもある水の精霊騎士アクエアルの部屋の前には、衛兵が警護に当たっている。だが、アクエアルが本気で部屋を抜け出ようと思えば、警護などなんの意味もない。

美しき精霊を本当の意味で縛りつけているのはエイヴァゼイン——その身に宿った火の精霊王・ヴァハの力であり、敗北の苦い記憶である。

囚われの精霊姫が幽閉されている王城の一室に、若き騎士がひそかに近づこうとしていた。衛兵に見咎められれば、当然入室は許されない。青年騎士マリオンは首から下げた水晶のペンダントをかざす。すると蒼い水晶はたちまち水となって青年の身体を覆い、あたかも透明のマントを羽織ったかのように青年の姿を不可視のものにする。

衛兵に気付かれることもなく、マリオンは王妃の部屋に入る。と同時に、精霊の前に姿を現した。

「アクエアル様——今宵も参りました」

「ああ、マリオン……」

薄手のナイトドレスは美女の肉感的なボディラインを引き立たせる、深い紺色。昼間の姿にも増して色気を放つ女体を、逞しい腕で抱きしめると、待ちかねていたように唇を重ねる。唇を割って押し入ってくる青年の舌を受け入れ、しばし濃厚な接吻を交わす。

「んちゅ、れる……アクエアル様の唇は、天上の蜜のようです」

「んっ、わ、私の身も心も既に地の底まで墮落し、穢されています。マリオンのような前途ある若者が、私などに触れては………んうっ、はあんっ」

唇から首筋に舌を這わされ、精霊姫は甘い声で身悶える。

青年のぶ厚い胸で巨乳が潰れ、大きな手が愛おしげに女の背を撫で下ろし、尻肉を愛玩する。精霊の甘い匂いを胸いっぱい吸い込むと、マリオンは熱い吐息を落として女体をわななさせる。

「貴女の染み一つない真っ白な肌も、気高き魂も、なに一つ穢れた部分などありはしません。あの傲慢な騎士どもに幾度犯されようと、王の慰み者になろうとも、私は貴女に忠誠を誓い、永久に尽くす所存です」

「ですが、私は我が君の所有物。こうしてあなたに会えるのは、我が君が戦場に出ているときだけ……会うほどに別れがつらくなりましょう」

「ならば、なぜ身隠しの水晶を私などにお与えになったのです。私の口づけで悶え、私のものでよがって下さったのは偽りだと仰るのですか」

「いいえ、違います、ちがいます、が……あふうっ」

騎士団の宴席で、無数の陰茎を生やした化け物に犯され悶えよがるアクエアルを見ても、若き青年騎士マリオンの心に精霊を見下す感情は湧いてこなかった。むしろ美しき女性を辱める騎士たちに怒りと失望を覚え、逆にアクエアルへの思慕と憐憫の情は日ごとに増していくばかり。

そしてエイヴァゼイン王が戦場に赴くのを待って、アクエアルとの密会を重ねるようになったのだ。青年騎士の一途な想いに水の精霊もほだされ、青年の純粋な思いについ肌を許してしまったのだ。

「どうか、今宵もこの煩惱多き哀れな男に温情を賜り下さい。騎士マリオンはアクエアル様、貴女を愛しております」

「ああ、いけません、あ、ああっ……！」

マリオンの腕が軽々と長身の美女を抱きかかえ、壊れ物のように丁寧に寝具に横たえる。完璧なプロポーションの起伏を確かめるように、乳房から腰、太ももへの曲線を幾度も撫でさする。

邪な王や騎士から蔑みの視線を投げられるのが当然の日々にあって、青年の情愛に満ちた愛撫は、それだけで精霊の心を癒やしていく。頬を紅潮させ、快感と幸福の涙を浮かべる精霊の目元に優しく口づけをすると、マリオンは紺のナイトドレスをゆっくりと脱がしていく。わずかな明かりの下で露わになっていく精霊の裸身は、数えきれないほどの陵辱の跡を寸毫も残してはいない。

「どうしてでしょう……騎士たちに乱暴されても、痴態を見られても平気なはずなのに、マリオン、あなたの前で肌を晒すのがこんなにも恥ずかしい……」

顔を赤らめて目を背け、腕で乳房と股間を隠す姿は、まさしく聖処女の振る舞いだ。かつては民たちの前で輪姦され、全身に汚い男の汚濁をぶちまけられてよがっていたアクエアルが、自分の前でだけ恥じらいを見せてくれるというのは、マリオンにとっては天にも昇る光栄である。

「それは、貴女の魂が未だ穢れていないという証。貴女の中の処女性は、喪われてはいないのです。その清らかさに、私のここも反応しております」

「ああ、マリオンの……苦しいでしょう、私にマリオンを慰めさせて」

「うっ、アクエアル様の手が……なんと畏れ多い」

たおやかな手が伸び、おずおずと青年の股間をまさぐってくる。既に膨張したそれを取り出すと、細い指を茎の根本に絡め、軽くしごく。アクエアルは身を起こし、怒張した肉茎に唇を近づけていく。

ちゅっ……ちゅぱ、れろ……花のような唇がそそり立つ肉棒についばむような口づけを浴びせ、てかり輝く先端を口いっぱい頬ばる。ねっとり絡みついてくる舌で丹念に味わい、じゅると唾液を啜り上げるように、唇で擦り上げる。慈しみに満ちた口淫に、マリオンの顔が愉悦に歪む。

「うおおッ、アクエアル様の舌使いが……ッ。そんなにされては、アクエアル様のお口を汚してしまいます」

青年の追いつめられた声に、水の精霊は淫靡な笑みを浮かべる。

「んふ……私は穢れていないと言ったのは、あなたではありませんか。それに、マリオンのならば、平気です。あなたの子種汁を、私に飲ませて……」

「うあああ……ツツ。くっ、こんなッ！ で、出ますツツツ」

どびゅうううツツ！ どくっ、どくんっ……びゆるる………ツツ!!

凄まじい勢いで迸った白濁が、精霊の口中に注ぎ込まれる。

うっとり目を細め、喉を鳴らして嚙下する精霊妃に、マリオンの興奮は加速していく。しゃらりと音を立てそうな銀の髪に手を添えて、「ぬぶうっ」と喉奥深くまでえぐり込むと、さすがの精霊も苦しげな声を漏らす。

「ああ、すみませんッ、止められない……止まらないツツ」

ぎゅ……とマリオンの腰にしがみついてくるが、アクエアルはただの一滴も口からこぼすことなく、青年の粘っこいザーメンを飲み下した。

大量の迸りをすべて胃の腑に収めてしまうと、銀精霊はゆっくりと口から陰茎を引き抜く。れろりと舌なめずりをする笑みは、淫らで、しかも美しい。大量射精に萎えかけていたマリオンの分身は、見る間に元の大きさを取り戻していく。

「まだこんなに元気……もっと私を愛してくれるのですね、マリオン」

「御意にございます、アクエアル様。ああ、花びらがこのようにいやらしいつゆを滴らせて……私の子種汁をお飲みになって、感じているのですね」

騎士の手がアクエアルの下肢を押し開いて、股間に顔を近づける。

銀のアンダーヘアに息を吹きかけ、指で肉の襞を開くと、乙女の内側は虹色の粘液でぬめっている。包皮に包まれた敏感な肉の芽に唇を被せて「ちゅっ、ちゅ」と音を立ててつえばむと、銀髪の精霊は身を震わせて喘ぎ声を抑える。

「もっと感じて……アクエアル様の淫らなお声を聞かせて下さい」

「ひゃ、ふううっ、は、恥ずかしい、です……ッ。はぁあんっ、マリオンの舌が私のおま○この穴にッッ、マリオン、あ、あっちも……あっちのはしたない穴も苛めて下さいっ」

御意、と青年騎士はアクエアルから賜った「身隠しの水晶」を取り出す。すると水晶は光に包まれ、棒状のものに変化していく。獰猛にめくれたカリ首に、血管の浮き出た茎、それはマリオン自身の陰茎をかたどった張り型。花びらに擦りつけて、蜜液をたっぷりつまぶしつけると、先端を尻の割れ目の奥にぬぶりと潜らせる。

「ふぁぁぁあっ！ マリオンのおちんぼっ、もう一本のおちんぼがお尻に入って……ッ」

青年は張り型で精霊の裏門をぐいぐい犯しながら、肉芽や肉襞をれろれろとねぶり回す。ずぬずぬと出し入れされるたびに、張り型のカリの部分が肛門肉を擦り上げ、アクエアルは腰を浮かせてひいひいよがる。

「らめええ、お尻も、クリちゃんも気持ちいいッッ！ もうっ、もう前にもちょうだいっ、マリオンのおちんぼでイカされたいのッッ」

「アクエアル様が望まれるなら、喜んで！ 前後の穴を私のもので満たしましょう!!」

すらりと長く伸びた下肢を持ち上げ、肩に乗せる。片手に握った張り型で尻穴を犯しながら、前の壺に勃起ペニスをあてがうと、マリオンは一気にアクエアルの中心を貫いた。ぎちぎちと淫肉が二本の茎の間で軋みを上げる。

「あああああ！ 太いッ、熱いッ。奥まで届いてますッッ!! 犯して下さいッ、マリオンのおちんぼで、二つのいやらしい穴を犯してエッ」

挿入と同時に、膣肉がアクメの痙攣を始め、青年の肉を締め上げる。水精霊の力で作られた張り型は本物のペニスのような熱を帯び、やがてそこから熱い疑似精液が乙女の直腸に注ぎ込まれる。

「ああ、お尻に射精されてるッ。イクいくぅ、おケツま〇こでイッチャうう！」

「アクエアル様ッ、前にも、前にもたっぷり注ぎ込んであげます！ うおおおお」

ケツアクメで悶え狂う精霊の膣を、マリオンは凄まじいピストンでえぐり、掘削し続ける。絶頂に登りつめたままのアクエアルをほとんど失神寸前にまで追い込んでから、青年は子宮めがけて大量の欲望を吐き出すのだった……………。

その日、王国軍にもたらされた謀反の情報が虚偽でなかったことは、若き騎士マリオンにとってせめてもの慰めだった。エイヴァゼイン王は民に大々的に密告を推奨しており、あらぬ嫌疑をかけら

れ、肅清の名の下に焼き討ちされた町や村は両手の指に余るほどだったからだ。

（なぜそれが民の心を離反させていると気付かれないのだ……ッ
ッ）

否——王が気付いていないはずがない。知っていて、放置している——あるいは煽っているのだ、民衆の不安を。あたかも人の心が放つ腐臭を糧とする、狡知に長けた忌むべき存在のように。

「ときに騎士マリオン。貴公はもう耳にしておるかな……我が妃の密通の噂を」

接收した邸での宴の席で、他ならぬエイヴァゼイン王から直々に問われた青年騎士は、心臓が止まるかと思うほど驚愕する。だがどうにか動揺を押し殺す。

「いえ、まさか妃殿下に限ってそのようなことがあるとは思えませぬ」

「密通、ではなく陛下が出陣している間の肌の火照りを抑えきれず、夜な夜な若い兵士でもたらし込んでおられるのでは御座いませぬか。なにせアクエアル妃殿下は、おぞましい化け物の肉棒でよがり狂うほどの色狂いでいらっしゃるゆえ！」

たっぷり酒をきこしめした壮年騎士の下品な言葉に、魔人王は呵々大笑する。

己の妃を色狂いとされて怒るところか、手を打って楽しんでいる様は、美しき水の精霊が妃と呼ばれつつも騎士たちからも蔑まれている肉奴隷に過ぎないということを、あらためて思い知らされる。

(クッ、あんなに気高い方をよくも……いや、耐えるのだ、マリオン・ブリューゲル。ここで謀反の意志を気取られてもすれば、なにもかもが水の泡だ)

騎士団の一員として王に忠誠を誓う振りをしながらも、マリオンは王への反逆、謀反の計画をひそかに進めていた。忠言、諫言をしたばかりに閑職に追いやられたり、真に王国の未来を憂う同志を募るのは、容易なことではなかったが、本当に信頼できる同志は徐々に集まりつつある。

(もう少しの辛抱です、アクエアル様。きっと私が貴女を解放してみせます)

気高き精霊騎士への一途な思いを胸にひた隠し、騎士マリオンは渾身の努力で追従笑いを浮かべ、恭しく王に酌をする。強い火酒をぐいと呷ってから、漆黒と炎の王は意味ありげな、とてつもなく邪な笑みを薄い唇に浮かべる。

「ときにマリオン。お前はまだアクエアルを抱いていないのではないか……？ 騎士団の騎士は我に忠誠を誓いし代償として、我が妃の肉体を貪り犯す権利を有している。みなの方の前で堂々とな。どうだ、抱きたくはないか、あの女を」

「は……………怖れながら、私のごとき若輩者の粗末なものでは、到底陛下や諸先輩方に敵うはずもございません。私とて、いらぬ恥をかくには忍びません」

「どうしてなかなか、騎士マリオン・ブリューゲルは娼館にも寄らず、清廉潔白な男と聞く！ だが、戦と修練ばかりでは、せっかく

のお宝も持ち腐れ!! ここは一つ、貴公のために特別な女を用意してやったぞ」

我ながらうまく誤魔化せたと思ったのだが、思いもかけぬことになった。

にやにやと見守る他の騎士たちの言いたいことはよくわかる。「付いてるもの付いてるのか、ケツの青いお坊ちゃん?」「まさか未だに女を知らぬわけではなからうな?」というからかいの眼差し。

愛しきアクエアル以外の女を抱くのは本意ではないが、ここは一つ彼らの所まで墮ちる必要がある。いわば通過儀礼のようなものだ。だが、王の命令でその場に連れてこられた女を見て、マリオンは今度こそ心臓が止まると確信する。

(ア……………アクエアル……様……………!)

そこに引き出された精霊の淫らな衣装と来たら、まさに目を疑うばかり。長いドレスの裾は無惨に引き裂かれ、下穿きを穿くことすら許されない。そして胸の部分には丸く切り取られた跡があり、包み隠されるべき乳房は哀れに露出してしまっている。

それでいて腕や肩を包む部分は破損がなく、そのことが逆に刺激的で、どうかすると全裸よりもいやらしく見える。

「エイヴァゼイン国王陛下……こ、これはいったい……妃殿下は王都に」

「今回は特別に従軍させたのだ。いい余興であろうが?」

アクエアルはマリオンとほんの刹那、視線を交わした後すぐに目をそらす。だがあらかじめそう言うように命じられているのだろ

う、マリオンの前に来ると目元に朱を掃きながら、自分で乳房を持ち上げて股を開く。

「我が君エイヴァゼインの忠実なるしもべ、騎士マリオンにご奉仕させていただきたく存じます。ど、どうぞ私の身体のどの部分でも、如何様にもお乗り下さいませ」

銀の髪が揺れ、甘い体臭がマリオンの鼻孔をくすぐる。たったそれだけのことで、股間のイチモツはたちまち堅く膨張する。

だが、完全に動転している青年はどうすることもできない。すると烈火の王は火酒の杯を掲げると、片手に握った短剣を己の腕に突き立てる。たちまち血の滴がこぼれ、それは酒の中に混ざる。

「さあ、景気づけた。我が血を干すのだ、マリオン・ブリューゲル」

怪しげな術にかけられたかのように、腕が勝手に杯に伸び、口元まで運ぶ。ぐいと呷る視界の片隅で、水の精霊の顔が絶望に染まっていくのが見えた。強い酒精が喉を灼きながら胃の腑に落ちていった次の瞬間、「ドクンッ！」と心臓が強く鼓動する。

「な……………？ ウ、ウァアッ……！ ウ、グォ、オオオ……」

意志とは無関係に、マリオンの手が胸を搔きむしり衣服を引き破る。目の前が真っ赤に染まり、頭の芯が沸騰するようだ。

「よいぞよいぞ、これは勇ましいことだ。なにをしている我が妃。お前の品のない尻穴でも使っていただくがいい」

(ア、アクエアル様、いけません！ 私のような者のために……ッ)

しかし思いは言葉にならず、マリオンの手は勝手にズボンと下着を引き下ろす。

ぶるんっ、と飛び出たイチモツはいつも以上にみりりといきり立ち、てらてらと赤黒く輝いている。それを見た騎士たちは賞賛の声を上げ、「早く犯せ!」「そいつの尻穴にぶっ込んでやれ!!」と囃し立てる。

アクエアルは顔を真っ赤にしながらもうしろを向く。愛しい青年騎士に豊満なヒップを向けると、上体を倒す。ぷるるんと揺れるむき出しの乳房、そして広げられた尻の割れ目の奥で息づいている、蕾のようなアヌスが現れ、なおも唸り声を上げる青年の欲情を容赦なく煽り立てた。

(クソッ、なぜだ! 身体が熱い、手が勝手に……貴女を、貴女をこんな場所で辱めるわけには……止まってくれ、私の身体!!)

血の出るような苦悩と訴えは意味をなさない。マリオンは両手でむんずと精霊の尻肉を掴むと、前戯もなしに亀頭を肛門に押し当てる。

「……騎士マリオン、どうか……わ、私めのはしたなく欲張りなケ、ケツの穴に……あなたの太く逞しいおちんちんを、た、食べさせて下さいませ……」

娼婦顔負けの卑猥なおねだりに色めき立つ騎士たち。下品な男どもに見守られつつ、マリオンは最愛の女性を自らの手で、最悪の手段で汚そうとしている。だが、慟哭の叫びは肉欲に飢えた獣のそれではない。

「ウォオオオオオオオ! ウガァアアアアアアア!!」

ずぶううっ！ めりめりめりいっ。青年騎士の巨根が、一気に根本までねじ込まれる。括約筋が軋みながら拡張され、かつて精霊騎士と呼ばれた銀髪の美女は、苦痛と快樂の入り混じった声を絞り出す。

「んああああっ、んっ、んぐぶううう!! お、お尻いいい、おしりに来てるうう、ぶっといおちんちんすごいのおおお!!」

「うあああ、グオオオッ。ふぬ、ふぐぬううう」

ずるるっ、と抜ける寸前まで腰を退き、再び下腹部を叩きつけると、精霊の形のいい尻肉が波打つ。ずるる……ずしんっ。ずるる……ズシンッ！ 深く重い一撃一撃が数えきれないほど犯されてきた精霊の直腸をいまひとたび陵辱する。精霊はそれに応え、快美の声と締めつけでマリオンに信じがたい快感を与える。

(あああ、アクエアル様の尻穴！ こんなことをすべきではないのに！なのに、全身に悦びが満ちていくようだ！)

エイヴァゼイン王——火の王ヴァハの血の魔力に幻惑されているとはいえ、青年は己の弱さが情けない。衆人環視の元、想い人の恥ずかしい穴をめちゃくちゃに犯し、なおかつ魅惑のアヌスがもたらす天上の愉悦に浸っている己の浅ましさが許せない。

「ふああんっ、おケツま○こきもひいいいんっ！ もっとお、もっとケツ穴ずこずこしてえへへ！ ふひっ、イクう、ケツま○こでイッちゃううう」

「まったく、ケツレイプに弱い女だなあ、そいつは！ オレが姦ったときも、ま○こよりケツの方で悦んでやがったぜ」

げひひと笑う大柄の騎士の言葉に、横の騎士も賛同する。

「オレのときもそうだ！ おい若造！ ケツにザーメンぶち込んだ後はな、その汚れたちんぽをおま○こで洗ってやるんだ。そいつ、涙を流してよがりまくりだぜ？」

（くそおおお、誰がそんな真似を……するものか！ 私は……わたしは……）

騎士マリオンはそのまま延々とアクエアルの肛門を犯し続けた。そして直腸に白濁を注ぎ込んだ後、まだ萎えぬイチモツを膣に突っ込み、再び腰を振り立てて精霊をよがらせ続けたのだった……………。

「あひいいい……おま○こでもイッちゃう、またイッちゃ……………うううう！」

王都に帰還したその翌日、騎士マリオンは同志と共に蜂起した。

ガッキイインソツツツ！ 鋼と鋼が激突して火花を上げる。宙を舞った長剣が石床に突き刺さり、金髪の騎士が手を押さえて呻く。

「貴様ッ、マリオン・ブリューゲル……ツツ！ う、腕を上げたな」

「修練は欠かしません。ですが、むしろ嘆くべきは飽食と淫楽尽くしでなまりきった、あなたの腕の方ではありませんか。……レオルギス騎士団長どの」

若き騎士マリオンは、同志たちと共に謀反の火の手を上げた。エイヴァゼイン王の遠征を好機と定め、一気に王城内を制圧、騎士団

のほとんどを捕縛するに至っていた。王が連れて出た兵士の数はたいしたことはない。反乱を起こした騎士、兵士たちは鮮やかな勝利に沸き上がり、騎士団の残党はこの広間に追いつめられた。

「マリオン様、こやつらも捕らえて地下牢に！」

「クッ！ 若造が、我が君の留守にこそどろとは片腹痛いわ！ せいぜいいまのうちに偽りの勝利に酔いしれるがいい、ヴァハ様のご帰還なさるまでの、ほんのわずかだ」

騎士団長の言葉にマリオンは眉をひそめ、反乱兵たちも困惑する。彼はいま、王を「エイヴァゼイン」と呼ばなかった。

「ヴァハ……誰のことを仰っておられるのか。いや、いい。いかにエイヴァゼイン王が魔物を操る術を持っていても、いまや王城、いや王都そのものが反逆の徒となった。既に勝敗は決した！」

「くっくっくっ……………これは最高の余興だ。お前は何もわかつちやいない、若造。もっともあのお方の力は、間近で見た者しか信じられないだろう。あの女——アクエアル同様、我が君も卑小な人間などとは比べるべくもないのだ」

「……………」

乱心したか、とマリオンと兵たちは騎士団長に哀れの目を向ける。

「ひっひひひひひ！ お前らはみんな死ぬ、偉大なる火の精霊王ヴァハ様に、地獄の業火で焼き尽くされるだろう！ だがオレは違う、オレはヴァハ様を召喚した側の人間だからな！ きっといまにヴァハ様が助けに来てくださ———」

「それはないな」

ずぼおおおッッ。金髪の騎士の胸板から、太い腕が突き出ていた。手の中にはまだ鼓動している彼の心臓。その背後に佇む巨軀は、遠征しているはずのエイヴァゼインその人だった。騎士団長は「ごふっ」と鮮血を吐き出し、一言「なぜ……」とつぶやく。

「我を召喚せし者、我と共に破壊の限りのうちに滅びん。火の精霊を呼び出したものが、その程度のことすら知らぬとはな。それに、部下の動向も掌握できぬ役立たずを、我が放置するとでも？ 醜態を晒すな、いますぐ燃え尽きよ……レオルギス!!」

「ぐぎゃああああああ!!」

轟、と胸に開いた大穴から、黒い炎が噴き上がる。邪悪な獣の舌のようにぶすぶすと傷口を焼きながら、炎は騎士団長を包み込み、生ける松明と化してゆく。おぞましいことに、金髪の騎士団長は全身が炭化するまでの間、「生かされて」いた。

「うっ」

人間の焼け焦げる匂いに、マリオンは吐き気を覚え口を押さえる。レオルギスの副官だった騎士は、呆然と団長と王を見つめるのみ。火の王はその様子を楽しげに眺めていたが、やがてただのまっ黒い物体になった騎士団長を、厭わしげに床に放り投げる。

「こやつは心の臓に、『縮地の印』を付けておいて正解だったわ。おかげで無謀な若者の愉快的な行動を見ることができた」

「エ、エイヴァゼイン……一体どうやって」

王は遠征に出たはずだ。こんなに早く戻ってこれるわけがない。それにさっきの炎……火の精霊王……ヴァハ……？ 若者にはなに一つ合点がない。だが、わかっているのは目の前の巨漢が

まぎれもない敵だということだ。マリオンは長剣を構えたが、いまにも恐怖で膝が砕けそうだった。

「お前は騎士団に入って日が浅いから、まだ知らなかったな。我はエイヴァゼインに非ず、王の肉体を借りて召喚されし火の王、精霊王ヴァハ！ 貴様とアクエアルの睦言、愉しませてもらったぞ」

エイヴァゼイン、いや火の王ヴァハの言葉にマリオンは愕然とする。眼前の男が真実人外の存在であることを悟ったのだ。そしてアクエアルと自分の密会を知りつつも、わざと放置していたことも。

怒りと羞恥、誇りを傷つけられた思いで剣を構え直すと、大上段から火の王に斬りかかろうとした、そのとき。

「待ってッ！ その人を殺さないで……!!」

ハッと振り返った先に、銀髪の美女がいた。もしやこの期に及んで王の命乞いをするのかと思ったが、水の精霊の視線は巨躯の王に向けられている。

「お願いします、ヴァハ……その人を、マリオンを殺さないで……………」

鮮やかなターコイズブルーのロングドレスに身を包んだ豊満な女体の胸の前で、精霊は杯を掲げている。漆黒の不気味な杯を目にした王は、「にい……」と唇を曲げて笑う。

「ほう、それは我の生命の証、『黒炎の聖杯』ではないか。反乱の騒ぎに乗じて結界内から奪ったか？ だがどうするつもりだ、我が妃。我に敗れたいまのお前に、それを壊す力はないと知っておろう」

「た、確かに……いまの私に、あなたの命を奪うことはできません。ですが、これなら」

清らかな水が命を持つように聖杯を包み込むと、その中で杯はぺきぺきと音を立てて変形してゆく。短剣と化したそれを、アクエアルは己の胸に向けて構える。

「ヴァハ……もう勝負は付いたはずですよ。私は敗北し、あなたの望むままに犯され、黜られ、快樂に溺れました。そのことは構いません。ですが、もうこれ以上この国の人々を苦しめないで欲しいのです」

つぶ……と剣先が白い肌にわずかに突き刺さる。

「黒炎の聖杯で作ったこの短剣なら、私の命を断てます。私は水のエレメントに戻り、あなたもここに存在する理由を失う……もっと早く、こうすべきだったのです」

「アクエアル様ッッ！」

「マリオン、許して下さい。この国を救うべく召喚され、しかしそれが叶わぬいま、私は役目を終えるべきでした」

ぐっ、と剣を握る手に力を込める。その手を思いとどまらせたのは、狂ったような王の哄笑だった。

「くっくっくっ……………はぁあっはっはっはっはっ!! よかろう、ならば命を断つがいい。お前の望み通り、我も火のエレメントに戻ってやってもいい。だが、それはこの国全土を焼き尽くし灰燼に帰した後だがな！」

ごおおおっと凄まじい炎の柱が立ち上り、それはヴァハの意のままに宙を躍る。不幸な副官を絡め取ると、哀れな男を容赦なく焼

き始める。

「ひiiiiiiiっ！ ヴァ八様、お慈悲を……っぎやあああああ！」

おぞましい惨劇を前に、騎士団の騎士も、反乱兵たちも後ずさりする。この凶暴な王がどこまでも本気だということを知ったのだ。ある者は腰を抜かし、ある者は武器を捨てて逃げまどう。狂える火の王は彼らを一人、また一人と炎の竜で捕縛して生きながら焼き殺していく。

しかし、その中でただ一人逃げようとしないう者がいた。

猛威を振るう炎竜には目もくれず、立ちつくしたままアクエアルを見つめているのは、若き騎士マリオン。愛しい女を見つめる眼差しは、しかしいまある感情に染まっていた。愛情とはもっとも対極にある感情——「憎悪」に。

「よくも——よくもたばかった……たばかってくれた！ アクエアルウウウ!!」

「マ、マリオン」

胸に剣をあてがいつつも、アクエアルは動けない。憎悪に燃える青年の視線が、精霊を金縛りにしている。

「永遠の愛を誓った！ いつまでも傍にいたと言った!! だがあんたは、最初からオレを裏切る気だったんだ！ 一人で逝って、オレを置き去りにする腹だったんだ。あんたは自分のことしか考えてなかった、オレのことなんか本当は必要でもなんでもなかったんだ、違うか!!」

「そ、それは……ですが、この国の民のためには」

かつては愛しあった一途な若者は精霊の行為を裏切りと感じ、己が魂を闇に売り払った。邪悪な甲冑に身をやつし、股間の凶器をそそり立てた格好で、水霊乙女を陵辱しようとして近づいてくるのを、見つめることしかできない。

「マ、マリオン。違うのです、私は……あぁッ」

びりびりいいいッ！ ターコイズブルーのドレスの肩口を掴んだ手を振り払うと、甲高い音と共に布地が引き裂かれる。巨乳がふるるとこぼれ出て、アクエアルはその場にくずおれた。哀れげな姿を見下ろす憤怒の面は、冷たく凍りついている。

す……と闇の騎士が屈み、乙女の細い足首を掴んで立ち上がる。

「あぁっ！ マリオン、や、やめてっ。ひっ、ひいいいっ」

両足首を掴まれ吊り下げられる水の精霊の股間に、闇騎士は食らいつく。下穿きを嚙んで首を振ってそれを引きちぎると、頭髪と同じ銀の陰毛が露わになってしまう。数えきれないほど辱められた陰部にかぶりつくと、ぴちゃぴちゃと精霊の股間をねぶり、犯し始める。悲鳴を上げる精霊姫の目の前で、勃起ペニスが重たげに揺れている。

「喧しいぞ、この雌猫が……………貴様の口にはこれがふさわしい！」

「むっ、むぐうっ？」

マリオンは器用に腰を振るい、凶悪な肉柱を戦乙女の唇にねじ込む。そしてそのまま極悪なまでに太い根本まで突き入れ、アクエアルの喉奥までも容赦なく犯す。ぐいぐいと喉奥を塞ぎ、乱暴に擦り

立てる。ぬめぬめした感触にマリオンは快美の声を漏らし、乙女は苦痛と呼吸困難に大粒の涙を流す。

「ぐふふう、ぴちゃ、れろれろっ、ふふふ、喉を犯されて感じているのか。股ぐらからいやらしいメスの臭いがぶんぶんしてきたぞ」

「んぐう、ぐふううっ。げふっ、ぐううっ」

わざと大きな音を立てて股間をねぶり回す暗黒騎士に吊り下げられ、哀れ精霊は為す術もない。吊り下げられ抵抗もできず、痴態を晒す精霊を火の王が、そして運良く炎竜に焼かれなかった兵士たちが固唾を呑んで見守っている。

「れるっ、ちゅばっ。こんな格好で辱められて、いやらしく蜜を垂れ流すなんて、なんて恥知らずな女だ。なにが清らかな水の精霊だ！ その忌々しい唇に、オレの怒りをぶちまけてやる、食らえ！」

ごすごすと腰をふるい、舌を膣穴にねじり込む。ピストンがいっそう激しく、いっそ喉を突き破らんばかりになった後、唐突に騎士は動きを止める。びくっ、びくっとして腰を痙攣させると同時に、アクエアルの形のいい鼻孔から白い液体が噴きこぼれる。

「げふうううっ！ ごふっ、ぐ、う……ツツ」

射精は恐ろしく長く続き、精霊の口内を延々と汚し続ける。唇から、鼻孔から樹液を漏らす乙女を見下ろしながら、漆黒の騎士は哄笑する。

「あぁっはははは！ くっひひひひ、なんだそのマヌケ面は？ 美しい顔もそうなっては台なしだな」

「ぎゃひんっ」

どすり、と両足首を放され、無様に落とされる精霊の姿に、見守っていた兵士の間から思わず嘲笑が漏れる。世にも美しい精霊姫が惨めに犯され、嘲笑われる……それは何度となく繰り返されてきた「いつもの風景」。

そして率先して乙女を汚しているのは、かつて精霊を崇拜し、愛していたはずの若き騎士だ。アクエアルの口から、後悔と苦悩の悲鳴が絞り出される。

「お、おおマリオン……あなたをこんなに苦しめたのは、私だったのですね。許して、どうか許して下さい、マリオン」

「苦しむ、だって？ そんなことはありませんよ、アクエアル様。いまの私はあらゆる苦悩から解放され、まことに清々しい気分なのです。貴女を思う様陵辱できると思うと、我が愚息もこの通り」

恐ろしいほどの量を出したばかりだというのに、青年の陰茎は前にも増して膨張している。パンパンに張りきった陰囊は、まだまだ大量のザーメンを溜め込んでいるようだ。だがマリオンはその程度では満足していない様子で、床に落ちた短剣に目をやる。

黒炎の聖杯——ヴァハの生命の源であり、それを作り変えた闇色の短剣だ。それを拾い上げると、マリオンはやおら己の下腹部にそれを突き立てる。

「マリオンッ!? そんなことをしてはダメッ」

「ふぬっ、火の力が……ヴァハ様の力が流れ込んでくる！ おおおお」

みりっ。みりみりみり……みちみちみちみちッ。肘ほどもある超巨大なイチモツが、さらに膨張する。ぱりぱりと生木を裂くよ

うな音を立てて、それは見る間に二本の巨根に分裂する。火の王ヴァハの尋常ならざるパワーが、青年の股間の凶器を増殖させてしまったのだ。

「ああ、なんてこと！ ヴァハッ、どうして彼を止めてくれないのですか。彼は人間の領域を踏み越えてしまった」

精霊の悲痛な叫びにも火の王はにやにや笑いながら見つめるのみ。その視線の先でマリオンは狂気をたたえた目で銀髪の犠牲者を射すくめている。二本の肉柱を揺らしながら近づくと、アクエアルの足を持ち上げて身体を曲げさせる。ねぶり回された肉唇が丸見えになり、そこに亀頭があてがわれる。

「ああっ、いやああっ！ マリオン、ダメッ、火の力に呑み込まれてはダメッ」

「呑み込まれてなどいませんよ、アクエアル様。私は心の底からこうしたいからしているのです。貴女はケツの穴を犯されるのも大好きでしょう。前とうしろ、同時にいたぶって差し上げますよ、嬉しいでしょう」

「あ、ああ……は、入ってくる……ふっ、太くて熱いイイイイツツ」

ぬぶぶ……ずぶぶぶ……めりっ、めりめりいいっ。ヴァハの巨根に勝るとも劣らぬ超巨根が二本、膣穴と肛門に押し込まれていく。そのどちらもが同じ男の生ペニスなのだ。数えきれないほどなぶり者にされ、すっかり感じやすくなったアヌスを押し広げられ、精霊の顔が愉悦に緩んでいく。

「はひ、ふひいいい。お、お尻の穴熱いイイツ、灼けちゃうウウツツ。中で、中でおちんぼが擦れあってるうううツツ」

「ふはははっ、入れた途端になんてざまだ、変態精霊が！ どうだっ、前もうしろも犯されて、気持ちいいのか、淫乱精霊！」

「ダメ……マ、マリオン、あなたは本当はそんな人じゃ、な……いひいいいツツ」

懸命に快樂に押し流されまいと、血が滲むほど唇を噛みしめる。だが青年騎士は容赦なく腰を振るい、真上から叩きつけるように前後の穴をほじくり返す。ぬちゅっ、ずじゅっと淫らな音が響き渡り、膣肉と肛門肉がぶりぶりと巻き込まれて亀頭に絡みつく。

「おおおっ、アクエアル様のま○ことケツ穴ッ。同時に二つの感触が味わえるとは……素晴らしい、どっちの穴も最高だツツ」

ただの人間の女と違い、精霊の性器もアヌスも衰えるということを知らない。

普通ならばがばがばに緩んでしまうほど犯されても、処女を失ったばかりのような締まりを保ち続ける。しかもいまのマリオンは熱くぬめった膣肉と、括約筋による尻穴、二つの異なった快感をまったく同時に味わえるのだ。

愛しさはそのまま反転して憎悪に変わり、美女の完璧なる肉体を貪り食らうことで、青年騎士は地獄のごとき快樂に溺れきっている。そして青年を憎悪のるつぼに叩き落としたのが、他ならぬ自分であると知っているがゆえに、アクエアルはただ陵辱に耐え、汚されることしかできない。

「うっっ、ま、マリオン……マリオン、ごめんなさい……………」

「ひゃっははは、どうしました？ 貴女ももっと悦んでいいのですよ。大好きな肉棒をおま○こにもケツ穴にもくわえ込んで、よがりまくりたいのでしょう。貴女は男の肉棒大好きな変態精霊ですからねえ？」

「あああっ！ ひい、ひいひいっ」

ぴしゃっ！ ばちいっ、ぴしゃぁんっ。むき出しになった二つの乳房に鋭い平手打ちが見舞われる。真っ白な肌に赤い手形が残るほどひっぱたかれ、精霊は銀の髪を振り乱して身をよじらせる。

「おやおや、こういうのも嫌いじゃないようですね。そら、そらっ！ 乳首を髑られるのも悪くないでしょう」

「ひいんっ、きゃひいひいんっ」

激しいピストンで二穴を犯しながら、マリオンは充血したニップルをつまみ、捻り上げる。痛みは倒錯した快樂となって精霊乙女を弄び、苦痛とも悦びともとれる甘い喘ぎ声が細い喉から漏れこぼれる。

「マリオン……ら、らめえっ。それ以上されたら、私、本当に……はひいひいっ」

「こんな惨めな状態で髑られて、ま○こ汁を漏らすか、この恥知らず！ さあ、その欲深い肉壺にくれてやるぞ！ 欲しいだろう、欲しいのか？」

がすがすがすと凄まじい突き入れを食らい、銀髪の精霊の顔が緩んでいく。焦点の合わない眼差しに浮かぶ愉悦の色。アクエアルは自ら乳房を捧げ持つようにして、青年の欲望の前に屈服した。

「欲しいのぉっ、マリオンのちんぽ汁欲しいiiiiっ！ ちんぽ汁でイカせてえ、おま○こと尻穴、一緒にイカせてえええええッッ」

「おおおおお、イカせてやる！ ちんぽミルクで昇天しろおおお」

どくんっつ、どびゅっ、びゆるびゆるびゆるっつっ！ 同時に迸った白濁はたちまち子宮と直腸を満たし……水の精霊は噴きこぼれた白い粘液にまみれながら、最大級のエクスタシーに達し、気を失った。

ガックリと胸に倒れ込んできた女体を、黒き憤怒の騎士はむしろ邪険に突き放す。「ぬぶ……」と二本の陰茎を引き抜くと、氷のような眼差しで精霊を見下ろし、くるりと振り返り火の王の前で恭しく膝を折る。

「我が君、火の精霊王ヴァハ様。此度の件、如何様にも私を処罰して下さい。そして願わくば王の慈悲を賜り、生涯あなたの下僕としてお仕えすることをお許し下さい」

水の精霊に愛を語っていたはずの騎士の言葉に、王はどっかと玉座に腰を下ろし、鷹揚に頷いてみせる。そして、呆然と立ちつくす反乱兵や騎士たちにも笑みをもって応える。

「我が忠実なる騎士よ、顔を上げるがよい。真に責められるべきは、若い男をたぶらかす魔性の女。我はこの場で宣言する、謀反の罪を犯せしものにも我は慈悲を与える！ 忠義を取り戻した証をこの場で立てよ！ 裏切りの雌狐を己のイチモツで懲罰せよ」

火の精霊王の超越力を目の当たりにした謀反兵たちは、思いもかけぬ命拾いに沸き立つ。謀反の罪を問わぬばかりか、水の精霊姫を陵辱せよとまで言われたのだ。

国を憂っていたはずの謀反人たちは、一転狂暴な衝動に駆られ、我先に忠義の証を立てようと、ぐったりと倒れている銀髪の美女に群がっていく。わずかに身体にまとわりついていたドレスが無惨に引きちぎられ、ほとんど全裸に剥かれたアクエアルに、男たちの無骨な手が襲いかかる。

「う……あああっ。ひいッ、ら、乱暴にしないで……んぐうううっ」

「おらっ、口開ける！ ひひっ、じゅるじゅる……うめえ、こいつのよだれうめえぜ！」

花のほころぶ唇に舌がねじ込まれ、唾液を啜り上げられる羞恥に精霊が頬を染める。その乳房にも兵士が吸いつき、充血したニップルにこりこりと歯が立てられる。腰や太ももが揉みくちやにされ、下肢のつけ根に指が何本もねじ込まれ、マリオンの注ぎ込んだ白濁液が掻き出される。

そのうちに、運のいい男が仰向けになると、天を仰ぐ肉柱の上に女体を抱え上げる。力強く太ももを抱き寄せると、真下から一気に勃起ペニスを根本まで打ち込んでくる。

「はひいいいっ、ふ、太いインッ」

「おおおっ、あのぶっといモノをくわえ込んでたとは思えない締めつけだ！ おらっ、どうだ、これがオレのッ、魔女への制裁だッッ」

「よおし、オレはもう二度と男をたぶらかせないよう、唇を懲らしめてやるぜ」

「んぐうう、ぐぶっ。んおお、ぶっといおちんぽお……んぐぐう」

騎乗位で犯される精霊の銀髪を力任せに引っ張り、喉奥まで激しく陰茎で擦り立てる。窒息の苦しみに涙を流しつつ、アクエアルの顔には確かに快樂の色が浮かび、それはいっそう兵士たちの興奮を煽り立てる。

火の王ヴァハから逃れる唯一無二の方法を失い、若き青年の寵愛までも喪ったいまのアクエアルにとって、この世界は自分の愉悦と苦痛と恥辱をもたらす無限地獄に他ならない。憤怒の暗黒騎士の股ぐらで、再び二本の肉棒がみりみりと天を仰ぎ、さらなる絶望を精霊に与えんとしている。

「貴様たち、その程度生ぬるすぎるわ！ その売女のケツを上げさせる。先刻以上によがり狂わせ、昇天させてやるッ」

真下から女陰を突き上げる兵士が、銀髪美女の尻肉を左右に大きく広げる。ずっぷりと貪欲に男根を呑み込んだ隠唇、その上にはマリオンのペニスを受け入れ、小さくすぼまったアヌスが、未だ新鮮なザーメンにまみれている。

固唾を呑んで見守る男たちの目の前で、マリオンは巨大にそそり立った陰茎を握って束ね、その二つの先端もろともに肛門穴にあてがった。

「あぎいっ。そんなッ、そのぶっといおちんぽを二本もだなんて……む、無理ですマリオンッ。あ、ぎひいい……ツツツ？」

「へへっ、ま○この方も締めつけてきやがる。いいんですかい、本当にケツ穴がぶっ壊れるかも知れませんよ」

膣穴を犯す男の言葉に、さしものアクエアルも顔色を失う。一本でさえ並の太さではない超巨根を、二本同時に肛門に突っ込もうと
いうのだ。肩越しに青年騎士を振り返る精霊の顔が、深甚な恐怖に歪む。

「い、いや……………本当に、やめ……マリオ……わ、私が悪かったから、ゆ、許し……それだけは、あ、ああ……いやああああああああ!!」

みりみりみりいいいっ！ めりっ、めりめりッ、ぎちぎちぎちぎちッッッ!!

「ぎひいいいいいい、ぎゃうううううッッ。おほおっ、おぐううううう」

それは、絶世の美女の喉から迸っているとは思えぬ、悲痛と苦痛の叫びだった。

逞しい腕が豊満な美尻を抱き寄せるたび、赤黒い先端が二つ、肛門を引き裂きながら直腸を犯していく。薄い粘膜を通して挿入される感触に、早くも下の兵士は精霊の膣にザーメンを迸らせる。

「おほおっ、しっ、搾り取られるうううッ」

「ふぎああああ、おケツッ、壊れ……壊されながら、イ、グウウ……ッッ」

文字通り肛門粉碎されながらも、愉悦と快楽に酔いしれるアクエアルの両手が宙をさまよう。その手に陰茎を握らせ、しごかせる兵士。腰を突き出す、乳房に陰茎を埋めようとする別の男たち。

「うおおっ、手のひらが吸いついてくるっ」

「ちんぼと乳首が擦れて、た、たまんねええええ」

「髪にッ、顔にもぶっかけてやる！ 口っ、口を開けやがれ、このツツ」

どびゅっ、びゆるびゆるっ！ びゅばっ、びちゃあああっ。

四方から降り注ぐ白濁汁に、銀髪の子種精霊はたちまちまみれていく。生臭い体液に全身を汚されつつ、水の精霊騎士と呼ばれていた女は、最高にして最低のエクスタシーに身を震わせ、喉を鳴らして男たちの子種汁を飲み下す。

「ふひいいっ、イイツ、イグううう、ザーメンおいひいいっ、おいひいいいいい！ おま〇こにもっ、ケツ穴にも、お口にもおおおお」

めりいっっ。ついに二本の巨大ペニスが根本まで肛門穴に埋没した。既に射精は始まっており、アクエアルの腹は見る間に妊娠しているかのごとくに膨れ上がっていく。膣を犯す兵士も精霊の子宮をたっぷりの白濁で充満させていく。

「ふひっ、ふひひひっ。出てるっ、おケツの中にザーメンいっぱい……ちんぼミルクでケツ穴いっちゃううう………っっっ」

「そうだ、イキ続けるんだ、お前は男の精液便所として、未来永劫、イキ続けるんだ。それが、お前の………貴女の、裏切りの償いなんだ……」

青年騎士の声には、いつしか深い疲労の色が刻まれていた。

「王国」の親衛騎士団でいまもっとも恐れられている「憤怒の暗黒騎士」の名は、辺境のみならず、砂漠や海の民たちの間にも広く知

れ渡っている。

「黒の火の王」として名高いエイヴァゼイン王以上に苛烈で、残忍で、反乱の予兆を見せた村々が幾つ灰燼に帰されたのか、それを知る者すらいまはない。だがその一方で、野盗や山賊に襲われた村の女たちを保護するという面もあり、憤怒の面の下は美青年であるとも噂されている。

また、王に忠誠を誓い投降してきた者に対しては寛大であり、ときに自らが王より賜りし美姫を抱かせることもあるという。かつて反乱の頭目であったとも言われる美姫は人間とは思えぬ美貌とスタイルを誇っているが、その性根は淫乱そのもので、いかなる男に対しても貪欲に陰茎を求め、三日三晩十数人の男に輪姦され続けても、なお男を求めてやまなかったとも言われている。

「ふん——その男か、反乱計画を密告してきたというのは」

反乱討伐軍の英雄にして、憤怒の暗黒騎士——マリオン・ブリューゲルは、風采の上がらぬ小男に、さして興味もなさそうな視線を向ける。男は見るからに裏切り者という呼び名がふさわしい狡そうな眼差しをしていて、それでいておどおどと落ち着かない視線を漂わせている。

「へ、へい。かの名高きエイヴァゼイン王に反抗しようという不逞の輩の集会が確かに今夜。騎士様におかれましては、ぜひお耳に入れておこうと。つきましては、その代わりと言ってはなんですが、その……へっへっへ」

だらしなくやに下がった小男の顔には、たぎるような性欲がありありと滲んでいる。

噂の美姫を一目見たい、絶世とされる肉体を味わってみたいと顔に書いてある。このうだつの上がない様子では、美姫どころか娼館でもまともに相手されないだろう。

にんまり……不気味な笑みを浮かべ、マリオンは男を駐屯軍の裏手の厩舎に連れて行く。動物特有の臭いと鳴き声に混じって、歌うような笑うような女の声が聞こえてくる。汚らしい藁の間からこぼれる目に鮮やかな銀の長髪。異常としか言いようのない光景に、密告者は息を呑んだ。

藁と泥にまみれたほぼ全裸の女が、軍馬の陰茎に頼ずりしながら微笑んでいる。身なりこそ酷いが、確かに女の容姿は抜群、いや人のものとは思えないほど整っていて、小男は股間が張りつめるのを感じた。

「我が君の妃にして、いまやけだものの相手まで務めている淫乱便所女、アクエアル様だ。あんなものでよければ、好きにするがいいさ」

既にマリオンの声も届いていない様子で、小男はふらふらと銀髪の女に近づいていく。取り出した勃起ペニスを目にした途端、水の精霊は目を輝かせ、男の所に這いずってきて、悦びに顔を輝かせてそれにむしゃぶりつく。

「ああ、ちんぽお、ちんぽ下さるの？ 嬉しい、またちんぽミルクいただけるのね。早くう、早くおま○こでもケツ穴でも使ってください……」

四つんばいになって男を誘うアクエアルに、密告者は飛びかかっていった。犯されて悶えよがる精霊の声に、騎士マリオンは背を向

けるのだった。

二次元ぷち文庫

精霊騎士アクエアル外伝

裏切りの騎士

酒井仁

キルタイムコミュニケーション制作部

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル1F

TEL 03-3551-6147 / FAX 03-3551-6146

TEL 03-3555-3431 / FAX 03-3551-1208

<http://ktcom.jp/>

著作権 ©Hitoshi Sakai 2014

当ファイルは、モバイル二次元ドリーム『精霊騎士アクエアル外伝 裏切りの騎士』に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

※本作品は電子書籍配信用に再編集しております。